

福 井 県 医 師 会

だまり

第550号 平成19年(2007)4月



表紙写真説明：空中都市マチュピチュ

1911年、ハイラム・ビンガムによって発見されるまで、世に知られることのなかった空中都市「マチュピチュ」。標高2400mの尾根筋にあるインカ帝国の古代遺跡には、目をみはるばかりです。巨大な石を組み込む技法、冬至や夏至の日を知るための石の建造物。どれをとっても謎ばかりで、ロマンの世界にひきこまれます。写真の動物はリヤマで、放し飼いになっていました。

鯖江市 今野 利男

排尿障害と前立腺癌検診について

泌尿器科医会会長 福 島 克 治



福井県の泌尿器科医は病院勤務、開業医とで、約40名、福井大学を併せて約50名強の会員でなっています。長い間、南後千秋先生が福井県泌尿器科医会の会長をしてこられました。9年前に私が引き継ぎ、現在に至っています。8月と2月を除き、毎月第4木曜日に集まり、症例検討会、講演会を行い、その後、全員で親睦会等をし、勉学と親睦に努めています。

今回は排尿障害と前立腺癌検診について述べさせていただきます。男女とも年齢と共に排尿に関する種々の訴えが多くなり、我々泌尿器科医の出番が多くなってきています。男性では、前立腺肥大症（BPH）が代表的疾患です。BPHの病態として、前立腺腫が増大すると、尿道抵抗が高まり、その結果として膀胱機能が影響を受け、複雑な様相を呈します。排尿障害を訴えてこられた場合、国際前立腺症状スコア（I-PSS）で症状を定量的に評価しています。評価項目は7項目で、残尿感、排尿間隔、尿線途絶、排尿の我慢、尿勢、腹圧排尿、夜間排尿回数についてであり、これを点数化し、その点数から症状の程度を軽度、中等度、高度の3段階に区分しています。頻尿、特に夜間頻尿を訴える場合には排尿日誌というものを書いてもらい、時間と量をチェックすることによって、水分の摂取の有無等を知って患者さんにアドバイスをするのに、大変都合のよいものです。我々泌尿器科医はこれらを参考にして、前立腺の大きさ、残尿量、尿流測定等を行い、BPHに対する診療ガイドラインに沿って治療を開始しています。前立腺癌の合併が問題になります。癌を見逃しては大変です。今では、簡単に採血して、前立腺特異抗原（PSA）をみるのが、絶対に必要です。このPSA値が異常値を示したら、必ず泌尿器科への受診を薦めて下さい。最近、尿意切迫感、頻尿、切迫性尿失禁などの症状を主体とした過活動膀胱（OAB）と呼ばれる病態が注目されています。BPH

では、約50-60%に、このOABが合併していると考えられます。OABに対する抗コリン剤等の薬があり、多数使用されていますが、BPHに合併しているOABに対して、残尿量の有無をよくみて、抗コリン剤を使用しないと尿閉をきたすことがあり、注意を要します。

BPHの治療としては現在多数の効果的な内服薬が開発され、症状の改善に役立っています。BPHの手術としては、大きな腺腫では、開腹しますが、殆どが内視鏡の手術が一般的ですが、内服薬による症状改善が著明で、手術に至る症例がかなり減少しています。

次に前立腺癌検診について述べます。近年高齢化に伴って、癌の発生も多くみられるようになりました。特にPSAの採血が一般的となり、異常値が見られれば、精密検査として前立腺生検を行い、癌の有無を検索しています。前立腺癌の検索に全国の市町村に対して前立腺研究財団が支援しています。福井市も2年間の支援を受けることになり、平成16年から、住民健康診査において前立腺癌検診が実施されています。PSAの採血を行い、異常値の人に二次精密検診を薦めています。その結果、平成16年度は、4632名（男性）中、PSA受診者1866名、要精検者143名、そして精密検査を行った80名中14名に癌を発見しています（受診者全体に対する癌発見率0.75%）。平成17年度は、4875名中、PSA受診者1378名、要精検者99名、精密検査を受けた53名中19名に癌を発見（受診者全体に対する癌発見率0.39%）。他の臓器に対する癌発見率より高率に発見されています。ひとつ問題があります。要精検者の多数の人が二次精密検査を受けていないことです。全員精密検査を受ければさらに癌発見が多くなることと考えられます。これが今後の課題です。平成18年度からは福井市の支援で前立腺癌検診が継続されています。